

【茨木神婚物語】

神武天皇じんむてんのうの皇后は、神の子だったといわれています。『古事記』こじきという文献には、物語が次のように記されています。

大物主神おおものぬしのかみは、三島溝咋みしまみぞくいの娘、勢夜陀多良比売せやだたらひめの容貌がたいそう美しかったので、一目見て心を奪われます。彼女がトイレに入ると、丹塗り矢にに姿を変え、溝を流れ下って陰部を突いたといえます。娘は驚きながらも不思議に思い、矢を部屋に持ち帰り、床のそばに置いたところ、たちまち立派な男性の姿になったとのことです。二人が結ばれて誕生した子が、神武天皇に迎えられ、皇后になりました。

話だけを読むと、女性がトイレにいるところへ侵入？すごい話だ・・・、と思われるかもしれませんがね。

大物主神は、そうめんおおみわじんじやで有名な奈良県の三輪にある、大神神社の祭神です。「三島溝咋」は、三島の地で溝を掘り杭を打つなど、治水灌漑を得意とした氏族の名前です。娘には、ただ会いに出かけても、簡単には近づくことができません。厳しい警護に守られた、箱入り娘でした。母屋と別棟でトイレが建てられ、溝を掘り、川から水を引いていたことがわかります。溝をまたげば、下は水が流れっぱなしです。このような水洗トイレ、もちろん普通の家にはありません。一帯を支配した豪族の長の家であり、そこの娘であったことを想像させるようにできています。丹塗り矢は、丹を塗った赤い矢。神社の破魔矢はまやに、丹塗り矢を見つけることができます。物語は、語られた当時の生活を豊かに表しています。

母方には、茨木市の溝咋神社みぞくいを訪ねることができます。平安時代の『延喜式』という文献に記され、式内社しきないしやと呼ばれる、古くから知られた神社です。歴史的には、奈良の三輪周辺の勢力が、淀川を渡り、茨木の地にまで及んでだことを示唆しています。古代の物語は、戦より、多くがこのような恋愛物語を得意として展開されています。

【『City Life』2012年4月号北摂版掲載】